

## イスラエルの民の頑迷と神ご自身が傷つくこと

まず、詩編78編40節から51節を祈りつつ読んでみよう。43節以下は出エジプトの際に起こったとされる物語、救済史の周辺の出来事の伝承である。エジプト王ファラオは頑なにイスラエルの出立を拒み、モーセと対立する。対立すればするほどファラオは追い込まれ、最後はイスラエルの出立を懇願するに至る。水が血に変わる出来事は出エジプト記7:14-24、「蛙」の難は出エジプト7:25-12、「ぶよ」の災難は8:12-16、「あぶ」の難は16-28、「蝗」の災難は10:1-20、「雹」の災難は9:13-35、「疫病」は9:1-7、最後の災いはエジプト人の長子の死であった。それらが起こった「川」、「流れ」（44節）は複数形なので「大河」ナイルの支流のことであろう。

### 1. イスラエルの頑なさ（40-42節）

出エジプト記の場合は古代超大国エジプト（「ミツライーム」は「どんづまり」の謂）のファラオの「頑なさ」「頑迷」が問題であるが、詩編のこの個所では、選びの民イスラエルに属する人々の「頑なさ」が問題となっている。イスラエルだけではなく、それほど、人は自分の流儀、やり方に「固執」するのではないだろうか？私が17歳の時、旧約・ヘブライ語聖書を初めて読んで感じたことはこの人の頑なさ（不自由さ）と神の忍耐と憐れみ深さ、自由さ（神の悔い改め）であった。この洞察は今も変わらない。

### 2. イスラエルの反抗と神の傷つき（40-42節）

39節までの神の「しるし」的な業、43-51節に述べられる業にもかかわらず、イスラエルの民は神に「反抗し」（神を扇動する、怒らせる）、「み心を痛め」（嘆かせる）、神を「試み」（waynassū）、神のみ業を「思わず」、あがないの日を「思い起さない」。本来信仰者は歴史における神の業を「記憶」し、それを「現在化」して生きるものなのであるが…。ここで、イスラエルのそのような態度に対して、神ご自身が傷つき、痛むのだという詩人・信仰者の感受性と信仰が心に響く。この神理解を黙想してみよう。

### 3. 神の怒り（49-51節）

ファラオの頑なさと彼を襲う災難は、実は、イスラエルの頑なさと直面する困難の「鏡絵」ではなかったのだろうか？「燃える怒り」と憤り、「激しい怒り（義憤、憤慨）と苦しみ（トラブル）」、「神の御怒り」と言葉が重ねられる。スタインベック『怒りの葡萄』（the Grapes of Wrath 黙示録14:10）を参照のこと。

神の怒りは神の義と愛が踏みにじられるときに発露される。「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現わされる」（啓示されるローマ書1:18）ルターが誤解していた「神の義」の発露である。この神の正義を心に留めながら、それゆえ、神を恐れながら、神ご自身が傷を負っておられること、神が「恵み」深く、憐れみ深いこと、信仰によって受けるべきキリストの「信実」による義について反省熟慮してみよう。

さらに、Anger Managementの重要性も考えよう：人は自分の正しさや（むろん）想いが否定・否認されたと考える時に「怒り」（Anger）を覚える。「プライド」の積極・消極面を考えてみよう。その

人の「怒り」を受容しながら、正しさや思いそのものがどこかで歪んでいないかどうか気づくように「対話」することが重要であろう。(現在は、また、「愛着」(Attachment) 障害のことも問題となっている。)